# 島津義弘の生涯

島津家の勢力拡大の最前線に常に身を置き、豊臣政権下では朝鮮で戦い、関ヶ原の戦いでも強烈な存在感を放った武将、島津義弘。その数え切れないほどの武功は、現在まで語り継がれています。

姶良市は島津義弘とゆかりの深い場所です。ここで初陣を飾り、武将としての活躍が始まりました。そして、再びこの地に戻り、晩年を過ごしています。

島津義弘ゆかりの地をたどり、その武人としての息吹、誰からも愛された人柄を感じてみましょう。

## 島津義弘年譜

義弘の主な拠点

1554~1560 平松（岩剣城・平松城）

- 一五三五年（天文四年）伊作城で生まれる
- 一五五四年（天文二三年）岩剣城攻めで初陣【合戦記】
- 一五六〇年（永禄三年）日向国飫肥領主の島津忠親の養子となり飫肥に三年在番する
- 一五六一年（永禄五年）養子縁組を解消して飫肥より戻る　横川城の戦いに参加
- 一五六四年（永禄七年）日向国真幸院の領主になり、飯野城に入る
- 一五六七年（永禄一〇年）菱刈氏との戦いに出陣、馬越城を陥落させる
- 一五七二年（元亀三年）木崎原の戦い【合戦記】
- 一五七七年（天正五年）伊東氏を破り、日向国が島津氏の領有となる
- 一五七八年（天正六年）耳川の戦い（高城川の戦い）【合戦記】
- 一五八一年（天正九年）肥後国南部の相良氏を降伏させる
- 一五八四年（天正一二年）肥後平定のため八代に入る
- 一五八五年（天正一三年）守護代となり、肥後の八代に在番　阿蘇氏などを下して肥後を平定する
- 一五八六年（天正一四年）大友領内へ侵攻、義弘は肥後より軍を進める　筑前国の岩屋城、豊後国の高城などを落とす　名を「義珍（よしたか）」とする　島津氏が停戦命令を拒否したため、豊臣秀吉が九州平定のために大軍勢を送り込む【合戦記】
- 一五八七年（天正一五年）豊臣に抵抗するも、当主の義久が降伏　名を「義弘」とする　義弘は抗戦の構えを見せるが義久の説得で降伏　島津氏は薩摩と大隅、日向の一部を安堵される
- 一五八八年（天正一六年）上洛して豊臣秀吉に謁見、豊臣姓を下賜される
- 一五九〇年（天正一八年）飯野から栗野に居城を移す
- 一五九二年（天正二〇年）朝鮮へ出陣（文禄の役）
- 一五九五年（文禄四年）朝鮮より帰国　栗野から帖佐に居城を移す
- 一五九七年（慶長二年）二度目の朝鮮出陣（慶長の役）　巨済島海戦や南原の戦いなどで活躍
- 一五九八年（慶長三年）泗川の戦い【合戦記】　朝鮮より帰国
- 一五九九年（慶長四年）剃髪して「惟新」と号す
- 一六〇〇年（慶長五年）関ヶ原の戦い【合戦記】
- 一六〇二年（慶長七年）島津家本領安堵、義弘も罪に問われず
- 一六〇六年（慶長一一年）帖佐から平松に居城を移す
- 一六〇七年（慶長一二年）平松から加治木に居城を移す
- 一六一九年（元和五年）加治木で逝去

1595~1606 帖佐（帖佐館）

1606~1607 平松（平松城）

1607~1619 加治木（加治木館）

## 蒲生の大クス

かもう

姶良市蒲生町上久徳 2259-1

蒲生八幡神社の大クスは推定樹齢1500年で、根回り約33.5m、高さ約30m。環境庁の調査で「日本一の巨樹」と認定されています。国特別天然記念物にも指定。義弘はこの神社を崇敬し、社殿を再興しています。

MAP. C-6

## 精矛神社

くわしほこじんじゃ

姶良市加治木町日木山 308-1

島津義弘を主祭神とする。かつて「本誓寺」という義弘の菩提寺がありました。明治の廃仏毀釈で廃寺となったあと、精矛神社がその役割を引き継ぎました。

MAP. G-7

## 加治木島津屋形跡

かじきしまづやかたあと

姶良市加治木町仮屋町 213

義弘が慶長12年(1607)より居館とし、ここで晩年を過ごしました。護国神社のある一角には石垣や石橋などが残る。「義弘公薨去地碑」もあります。

MAP. G-6

## 実窓寺礎

じっそうじかわら

姶良市加治木町本田 4015-5

義弘の遺去に殉じて７人がこの地で自決しました。彼らの殉死をしのび、安永５年(1776)に石碑、天明５年(1786)に石灯篭が建立されました。

MAP. F-7

## 平山城跡（帖佐新正八幡神社）

ひらやまじょうあと

姶良市鍋倉 1129-8

大隅合戦でも戦場となりました。域内には神社があり、義弘も祈願に訪れています。関ヶ原から帰還できたお礼に、三十六歌仙の額を奉納しました。

MAP. E-6

## 建昌城跡

けんしょうじょうあと

姶良市西餅田 2185

もともとは「瓜生野城」。戦国期は廃城となっていましたが、関ヶ原の戦いの直後に義弘により改修されました。

MAP. E-7

## 膝跪駻の墓

ひざつきくりげ

姶良市鍋倉 1332

義弘の愛馬「膝跪駻」の墓。木崎原の戦いで敵に槍を突かれた際、膝をついて義弘を守ったとされています。かなりの長命で、義弘とともに各地を転戦しました。

MAP. E-6

## 龍門司坂

たつもんじざか

姶良市加治木町木田 5088-1

山中に苔むした石畳の道が続く。江戸時代初め頃より薩摩藩の主要街道として整備され、参勤交代や物資輸送などで使われました。国指定史跡。

MAP. G-6

## 龍門滝

りゅうもんだき

姶良市加治木町木田 5266-1

高さ46m、幅43m。水量があるときは大迫力。豪快な景観が魅力です。『日本の滝百選』にも選ばれています。

MAP. G-6

## 帖佐御屋地跡

ちょうさおやじあと

姶良市鍋倉 776

文禄４年(1595)より約10年間にわたって義弘が居館としました。当時の石垣が残っていて、敷地には稲荷神社があります。

MAP. E-7

## 花園寺跡公園

かえんじあとあとこうえん

姶良市鍋倉 775-3

帖佐御屋地の一部で、義弘の看経所（仏前で経文を黙読する場所）があったとされています。のちに花園寺が建立され、枯山水の跡などその痕跡を見ることができます。南側には石垣も残っています。

MAP. E-7

## 重富海岸（重富海水浴場）

しげとみかいがん

姶良市平松 7703-4

白砂青松の砂浜で、遠浅の海には干潮時に干潟も出現します。一帯は霧島錦江湾国立公園にも指定。岩剣城攻めでは島津軍は船も使っていて、この付近に上陸しています。

MAP. E-9

## 平松城跡

ひらまつじょうあと

姶良市平松 5636

義弘は岩剣城の在番を命じられますが、山上では不便なために麓に平松城を築城。ここを居館としました。現在は小学校になっていて、当時の石垣を見ることができます。

MAP. D-8

## 岩剣城跡

いわつるぎじょうあと

姶良市平松 5219-6

三方は切り立った崖で、残る一方は白銀坂から伸びる尾根につながっています。山頂の標高は約220m。登山道もあり、曲輪跡や石垣などが残っています。

MAP. D-8

## 蒲生城跡（蒲生城山公園）

かもうじょうあと

姶良市蒲生町久末 3459-1

広大な山城で、蒲生氏が本拠地としていました。今は公園になっていて遊歩道も整備。曲輪の痕跡などがよく残っています。春は桜が咲き乱れ、花見の名所にもなっています。

MAP. C-6

## 白銀坂

しらかねざか

姶良市脇元 3091

薩摩国と大隅国の境界にあたり、険しい地形から難所とされていました。岩剣城攻めで、義弘はここに陣を構えました。江戸時代に整備された石畳の道が現在も残っています。国指定史跡。

MAP. E-9

## 島津義弘系譜略図

- 忠良（一四五〇年～一五六八年）（日新斎）
  伊作島津家の第十代当主。息子の貴久に島津宗家を相続させ、薩摩での主導権を握りました。
  - 貴久（一五二四年～一五七一年）
    第十五代当主。反抗勢力との戦いを制して薩摩をほぼ平定。戦国大名として足場を固めました。
    - 義久（一五三三年～一六〇二年）
      貴久の長男。第十六代当主。薩摩・大隅・日向を平定、さらに九州北部へと勢力を伸ばしました。
    - 義弘
    - 歳久（一五三七年～一五七〇年）
      貴久の三男。豊臣秀吉の麾下で、敵に矢を射かけるなど、豊臣軍に対して最後まで抵抗しました。
    - 久保（一五三三年～一五七三年）
      義弘の次男。島津家の後継者として朝鮮出陣中でまもなく病死。若くして病没しました。
    - 忠恒（一五六六年～一六三八年）（家久）
      義弘の三男。薩摩藩の初代藩主。関ヶ原の戦いでは義弘と共に戦後処理に奔走しました。
    - 家久（一五四七年～一五八七年）
      貴久の四男。戦国時代に指折りの戦上手。神田畷の戦いでは敵倍もの敵軍勢を壊滅させました。
    - 豊久（一五七〇年～一六〇〇年）
      家久の長男。関ヶ原の戦いで義弘を逃がすために奮戦。命を落としました。

## 蒲生の大クス

### 自在に馬を操る

八十歳を過ぎても義弘は悠々と馬を乗りこなし、山を駆け下ると、慌てて追いかける若い家来達の眼の前に並べ「あたまが高い、大変結構な乗馬三列にいます。」と部下に命じます。「俺の間を駆け抜けよ」と命じると、馬が鉦鼓の音に驚いて動こうとせず、馬腹をけってみよ」と義弘がムチを入れると、馬は列の間を駆け抜けました。

### 猫

義弘は、朝鮮に七匹の猫を連れていきました。猫の目を見て時刻を知り、戦闘に活かしたとされています。二匹は日本に生還しました。

### 文化人

義弘は学問に秀で、教養ある文化人でした。茶道もたしなみ、千利休の教えを受けています。豊臣秀吉から茶器を賜ったという記録も残っています。

### 愛妻家

妻宛の手紙が多く残り、義弘が愛妻家であったことがうかがえます。朝鮮からの便りには「今夜もあなたを夢に見ましたよ」などと、文を書かれています。

### 都下思い

朝鮮出兵では家来さが厳しく、日本軍では逃亡者が続出。しかし、島津隊には逃亡者もいなかった。義弘は兵士たちと寝食をともにし、火が不足していないか常に気を配っていました。

### 戦場の名医

義弘は医術を習得していて、戦場では兵士の傷を治していました。義弘配下の木脇祐秀は朝鮮の海戦で矢を受けた際に、義弘の治療で息を吹き返しました。義弘の治療で命をかけて働きます。以来、義弘のために命をかけて働き、最期は義弘を逃して殉死しました。

### 敵も味方も供養

木崎原合戦では島津軍・伊東軍ともに多くの戦死者を出しました。その供養のために義弘は六地蔵を建てていました。伊東（朝鮮の戦いから帰った後）は「敵も味方もあとには紀伊国（和歌山県）の高野山に供養塔を建立（建て）し、敵も味方も平等に供養する」と刻まれています。